

体験型海外教育実地研究 第5学年 異文化理解

「Kendo」

教育学研究科 学習科学専攻 カリキュラム開発専修 池田 大徳

1 はじめに

私は中学生の時、2週間、アメリカにホームステイをしたことがあった。その時のホームステイで、アメリカの水や食事が体に合わず体調を崩すなどして、大変な思いをしたため、それ以来、私は海外文化に対する抵抗を少なからず持つようになっていた。

国際化が進む現代において、グローバルな視野を持って物事を考えることは益々重要とされている。将来、教師として子どもたちにその重要性を説く私自身が、海外文化への抵抗を持っていることに対し、私は違和感を覚えていた。

そのようなときに、指導教員である松浦武人先生からこの体験型海外実地研究の様子をお聞きすることがあった。これを機会に私自身が海外文化を改めて受け入れ、自らのグローバルマインドを高めたいと考え、本研修の参加を決めた。

2 実地研究の日程と概要

月日	曜	交通等	訪問地・用務等	宿泊地
4/24	水	渡航までの日程, パスポート, ESTA, 授業研究テーマ事例, 部屋割り		
5/15	水	授業研究テーマ案の交流・テーマの設定		
6/6	木	学習指導案の検討		
6/11	火	学習指導案の検討		
6/24	月	学習指導案(英語版)の検討		
7/1	月	学習指導案(英語版)の検討		
7/6	土	第9回学校間交流国際フォーラム		
7/7	日	ワークショップ: 学習指導案および教材・教具の検討		
7/22	月	保険説明 (学習指導案の検討, 指導案の提出について)		
7/23	火	保険説明 (学習指導案の検討, 指導案の提出について)		
8/26	月	準備状況確認, 報告書・教材集・発表会について, 渡航準備・関係書類提出		
9/9	月	最終事前打ち合わせ (準備状況, 準備物・集合時刻等の確認)		
9/14	土	広島—成田 0755-0935 (NH-3236) 成田—ワシントン ダラス 1105-1040 (NH-2) ワシントン ダラス—ローリー 1220-1329 (UA-4880) 空港 — (ウォーレン先生・ECU バス) →City Hotel & Bistro		アメリカ・ノースカロライナ州 City Hotel & Bistro 203 W. Greenville Blvd, Greenville, NC 27834 TEL(877)2712616 Greenville
9/15	日	(ウォーレン先生・バス)	ミーティング, ホテルにて教材作り 各学校の先生方と事前打ち合わせ レセプションパーティ	Greenville 同上

9/16	月	City Hotel →Wahl-Coates E.S.へ(ウォーレン先生・バス)	学校訪問 (Wahl-Coates E.S.) ・校内見学, 授業見学 ECU 訪問 ・構内 (図書館) 見学 ・大学生との夕食	Greenville 同上
9/17	火	City Hotel →Wahl-Coates E.S.へ(ウォーレン先生・バス)	学校訪問 (Wahl-Coates E.S.) ・校内見学, 授業見学 ・授業実践 (坂本, 池田, 常安, 明道, 酒井) 夕食会 (ECU フットボール場)	Greenville 同上
9/18	水	City Hotel → ECU (ウォーレン先生・ECUバス) ECU → ローリー (ECUバス)	午前 ECU の講義に参加 午後 ローリーへ移動 歴史博物館, 自然史博物館を見学する。	ノースカロライナ州 Clarion Hotel State Capital 320 Hillsborough Street Raleigh, NC 27603 TEL(919)8320501 Raleigh
9/19	木	徒歩で, Exploris M.S.へ	午前 学校訪問(Exploris M.S.) 午後 ローリー市内見学 ・自然史博物館, を見学する。 Exploris M.S.の先生方と夕食会	Raleigh (同上)
9/20	金	ローリー→ワシントン ダラス 1021-1134 (UA-4887) (空港→ホテル間はタクシー)	ワシントンへ移動 アメリカ文化体験 ペンタゴンモール観光	Washington Plaza 10 Thomas Circle, Northwest, Washington,DC 20005-4176 TEL (202)8421300 Washington, DC
9/21	土	徒歩	アメリカ文化体験・Book Fair ・スミソニアン博物館, リンカーン記念館を見学する。	Washington DC(同上)
9/22 9/23	日 月	ホテル→空港 (タクシー) ワシントンダラス→成田 1220-1525 (NH-1) 成田→広島 1740-1915 (NH-3237)		

3 実地研究授業

3.1 単元名 第5学年 異文化理解「Kendo」

3.2 事前準備

① 単元設定の理由

本単元のねらいは、以下の2点である。

- ・日本固有の競技である剣道に触れることを通して、異文化について理解することができる。
- ・礼儀作法、ルールの意味・よさを考えることで、感謝する態度、相手を思いやる態度を身に付けることができる。

私は、小学1年生の頃から剣道をしており、現在も続けている。私にとって、最もなじみが深く、または最もよく知る日本の伝統文化が剣道であり、この剣道のよさを海外の子どもたちに伝えたいと思い、この単元を設定した。

しかし、単に日本の文化を紹介するだけでは異文化理解にとどまってしまう。そこで、日本の伝統文化である剣道を通じて、日米に共通する価値観について考えることが出来るようにすることで、多文化共生についての理解を図るよう考えた。

今回は剣道の中でも礼儀作法、ルールに着目し、その意味・よさについて触れることで、国を越えて普遍的な価値観である「他者を尊重することの大切さ」について考えさせていく。

② 準備したこと

授業を構想する際に注意したことは、体験的活動の導入である。授業の導入部分において、授業者だけでなく子どもたちにも実際に使用している竹刀を用いてデモンストレーションを行うことが出来るようにした。また主となる活動において単に映像を見て剣道と他のスポーツの応援を比較させるのではなく、子どもたちに映像に合わせて映っている観客になりきって応援させ、比較することが出来るように構想した。体験的活動を通じて、言語以外のものから伝わることを大切にしてほしいという思いから以上のような構想に至った。



またデモンストレーションにおける指示や「他者を尊重する心情」という抽象的な概念を英語を通して伝えることに不安を感じたため、視覚教材を用いて授業を展開することに努めた。Wahl-Coates E.S.では電子黒板を使用して授業を行うことが出来ると聞いていたため、パワーポイントを利用することにした。これにより、授業を比較的スムーズに展開することが出来たように思う。

3.3 学習指導案

Lesson Title: Kendo

Lesson Author: Hironori Ikeda

Date: September, 2013

Grade levels: 5th grade

Subject: Culture

Description: In this class, students will understand kendo, which is a traditional Japanese sport and a part of Japanese culture, through introducing it and demonstration of kendo using newspaper and a bamboo sword used for kendo practice. Students will know the meaning of kendo manners and rules and realize the respect for others' feelings and the thankfulness.

Objectives: As the result of the activity, students will be able to

- 1 Understand Japanese culture through kendo which is an original sport of Japan.
- 2 Learn to respect for others' feelings and have appreciation by learning the meaning of kendo manners and rules.

Procedure

Activity	Teacher's activity	Materials
1. Greeting	1. Introduce myself and tell them what they will learn in this class.	
2. Learn about kendo.	2. Show pictures of kendo and introduce kendo.	Pictures
3. Demonstrate kendo using newspaper and a bamboo sword used for kendo practice.	3. Raise students' motivation by demonstration of kendo.	Newspaper A bamboo sword
4. Know manners and rules of kendo.	4. Tell that a shout of joy that students gave when watching another sport is forbidden and introduce other manners and rules. • Forbidden to clench one's fist in triumph during kendo. • Must make a bow when you enter in kendozoyo and go out of kendozoyo.	PC
5. Think about meaning of kendo manners and rules.	5. Make students think the meaning of kendo manners and rules and introduce that. • Not to make another player unpleasant. • To thank for kendozoyo, where players can do kendo.	

3.4 授業の実際

- (1)自己紹介を行い、続いて本時のテーマである「剣道」の説明をした。
- (2)小さな竹刀で新聞紙を真っ二つに切るというデモンストレーションを行った。まずは授業者が行い、次に子どもたちが行った。

- (3)スポーツ(アメリカンフットボール, 野球)の映像に合わせて, 応援している観客を演じるように指示した。
- (4)授業者が剣道の映像に合わせて, 応援している観客を演じ, 剣道の観客の様子を見せた。
- (5)剣道の映像に合わせて, 応援している観客を演じた授業者の様子と, 他のスポーツの観客を演じた自分たちの様子を比較し, 異なる点を考えるように指示した。
- (6)剣道は, なぜ声援による応援が禁止されているのか考えさせた。
- (7)他にも剣道独特のルール・礼法(競技中ガッツポーズが禁止されている, 剣道場への入退場の際には礼を行わなければならない)を紹介し, 剣道の根底には相手を思いやる気持ちがあることを伝えた。
- (8)我々の生活は様々な人によって支えられており, 周りの人々を思いやることの大切さを伝えた。
- (9)最後に授業の感想を書かせ, 授業を終了した。



3.5 考察



本時の成果は, 本授業の導入部分が子どもたちの興味・関心を高めるものであり, 子どもたちが意欲的に授業に参加できたことと考える。日本文化の象徴とも言える「侍」が行っていた剣術が基となった剣道は, 現地の子どもたちにとって大変興味深かったようで, 竹刀と使ったデモンストレーションでは, 設定していた時間に収まりきれないほどの希望者があり, 中には身を乗り出して挙手をする子どももいた。

しかし, 授業のまとめが授業者から子どもたちへの一方的なものとなってしまう, 子どもたちの思考を止めてしまったことが今回の実践で悔やまれる点である。「他者を尊重することの大切さ」を子どもたちが自発的に感じることが出来るような手立てが考えられていれば, 子どもたちは授業の最後まで思考することが出来ていただろう。

4 体験型教育実地研究における自己変容

4.1 教育観の変容

「無いものを欲しがることよりも, まず有るものをいかに使うかということを考えなくてはならない。」

これはローリーの Exploris M.S.での学校訪問を終えた後に, ある先生がおっしゃった言葉である。Exploris M.S.は, 元々, 車のディーラーが入っていた建物を改装して校舎にしており, グラウンドや実験室など通常学校に備わっている設備がないものもあった。そのため設備面からみた学習の環境は整っているとは言い難い部分もあった。しかし, そのような環境の中でも, それらを最大限に生かし, 子どもが自らの課題を決定し, 授業を展開していくという子ども主

体となった授業が行われており、子どもたちの姿は大変いきいきとしているように見受けられた。そのような子どもたちの姿があったからこそ、ある先生は前述したような言葉をおっしゃっていたのだろう。



アメリカに行き授業をいくらか観察させていただいたが、その度にアメリカの充実している ICT 機器や子どもに対する教師の人数など日本にないものを羨むばかりだった。しかし、環境が整っているとは言い難い中でも、Exploris M.S.のように素晴らしい教育を施すことは出来る。無いものを欲しがる以前に、まず第一に今有る物を最大限に生かし努力することが重要なのだと感じた瞬間であった。

4.2 自分自身についての変容

はじめに述べたが、私は以前、海外に対する抵抗があった。しかし今回の研修を通して、私はその抵抗を全てなくすことが出来た。その大きな理由として考えられるのは、アメリカ人の人柄に触れたことである。必ず目を見て話し、ほほえみ、大らかで、前向きで、そのようなアメリカ人の人柄に今回の研修中、何度も癒されてきた。人とのつながりが、今回私の海外に対する意識を変えたのである。

4.3 グローバルマインドに関する変容

今回のアメリカ滞在中、私は日本とアメリカの文化の違い、または価値観の違いを数多く垣間見ることが出来た。はじめはその違いに戸惑っていたが、次第にその違いを受け入れ、楽しむことさえも出来るようになった。この価値観の違いを受け入れ、楽しむ姿勢は私の今後の他者とのかかわり方に大きく影響を与えると考える。自身と価値観が大きく違う人とのコミュニケーションは、億劫になりがちで、その人を否定的に捉えてしまうこともある。しかし、その違いを受け入れ、楽しむことが出来るようになれば、広い視野から物事を多角的に捉えることが出来るだろう。

5 おわりに

この体験型海外教育実地研究は、私にとって大変実り多いものとなった。このように充実した研修が送ることができたのは、4月からの学習会、または滞在期間中、きめ細かな指導をしてくださった小原友行教授を始めとする GPSC の諸先生方、ECU の Warren 先生を始めとする現地でのサポートをしてくださった諸先生方、そしてほとんど聞き取ることの出来ない私の英語を一生懸命聞き取ろうとしてくれ、熱心に授業に参加してくれた Wahl-Coates E.S. の子どもたちのおかげである。心より感謝申し上げます。

さらに英語力を高め、今回の研修を今後の私の教育人生に生かすことで、GPSC に恩返しをしていきたい。

